

角谷不二雄先生は、現在副院長を務める富良野協会病院において、およそ20年にわたり富良野地域の小児医療を支え続けてきた。その間、特に患者数の多い感染症に興味を惹かれ、2015年のシーズンから、地域でのインフルエンザワクチンの効果について、test-negative case-control designでの研究を開始。多忙な実地臨床の傍ら、研究者としても成果を上げている角谷先生に、富良野における小児のインフルエンザ診療のこれまでとこれからをお話しいただいた。



角谷不二雄

北海道社会事業協会富良野病院
(略称：富良野協会病院)
副院長（小児科）

富良野における小児のインフルエンザ診療

富良野医療圏では地域の子どもが
2つの医療施設に集中

——先生のご経歴について、簡単にご紹介ください。

角谷 旭川医科大学の6期生として1984年に卒業し、同大小児科に入局しました。1997年に富良野協会病院小児科の主任医長として異動し、以来20年間この地域の子どもを診ています。

——富良野地域の医療の特徴をお聞かせください。

角谷 富良野医療圏は、富良野市、上富良野町、中富良野町、南富良野町、占冠村の5市町村から成ります。2015年の国勢調査では人口42,597人でしたから、かなり小さな医療圏です。ただし、患者さんは二次医療圏内に留まらず、場合によっては1時間半くらいかけて、周辺の市町村から集まってきます。2015年の当院小児科の入院患者さんの内訳をみると、最も多い富良野市が半分程度を占めますが、4位には二次医療圏外の芦別市が入っています。また、富良野は観光地なので、毎年2～3人は観光にいられた外国人の入院患者さんがいます。

富良野医療圏内で、一般入院病床をもつ小児科は、当

院だけです。また小児科は、当院の他には旭川医大の第1期卒業生で私の先輩にあたる印鑰史衛先生のクリニックがあるだけです。この2つの施設に、地域の子どもが集まってくる体制になっています。

——小児科の地域連携はうまく機能していますか。

角谷 印鑰先生は、旭川医大時代からよく知っている先生です。私が富良野に来たのも、印鑰先生が開業され、



施設外観